

## コテージ・ガーデン

### —— 内向するイングリッシュネス（1）

安西 信一

#### 序 イギリス近代庭園史における拡大と閉塞

わが国では『フランダースの犬』（*A Dog of Flanders*, 1872）で知られるイングランド出身の女流作家、ウィーダ（Ouida, Marie Louise de la Ramée, 1839-1908）は、十九世紀末に出版されたエッセー「庭園」<sup>(1)</sup>（*'Gardens'*, 1895）の中で、自国のコテージ・ガーデンの美について次のように書く。

もしもイングランドのコテージ・ガーデンが消え去り、ただ忌まわしいヴィラの庭園や、痛々しいほど幾何学的なアロットメント〔耕作用貸付地…後述〕の畑だけが残ったとしたら、花々にとっても国民にとっても嘆きの日となるだろう。かつてクレズウィックやコンスタブル、クローム父やデイヴィッド・コックス<sup>(2)</sup>が見て知っていた、そしていまでも見ることのできるイングランドのコテージ。バラが軒まで這い登り、ハチがキダチヨモギやノバラの中で羽音を立て、赤と白のカーネーションがホウセンカやアレックスと並んで生えるイングランドのコテージ。それは甘美な田園の想いである。いまでも記憶の中で、あわ立つシラバブや赤いチェリー、琥珀のような黄色の蜂の巣と結び付き、庭の木立の向

こうから聞こえる、生まれたての子羊の物憂げな泣き声を思い起こさせる。イングランドを知る者ならだれしも、記憶の中にこうした絵、それどころか、百枚ものこうした絵をもっていることだろう。(3)

イングリッシュネス（イングランド性・イギリス性）<sup>(4)</sup>の典型としてのコテージ・ガーデン。この広く共有されたイメージは、たとえばヘレン・アリンガム（Helen Allingham, née Helen Mary Elizabeth Paterson, 1848-1926）の多くの水彩画や、最近わが国でも無数に出されている「ガーデニング」関連書籍を通じて、現代の日本人にとってさえ、馴染み深いものとなっている。しかもウィーダの描くコテージ・ガーデンは、十九世紀末の「いま」に続くものでありながら、いにしえのイングランドの記憶と、幼少時の記憶の両方に包まれることで、失われつつある過去、古き良きイングランドへと誘うものでもある。

続けてウィーダは、このコテージに住む「貧民」(the poor)の「つましち」(thrift)について語る。そこからもわかるように、この庭は決して大きなものではない。そして先の引用文の前に現われる彼女の次の言葉からすれば、それは閉ざされていることを特徴とすると考えねばならない。

どのような庭園でも、十分に緑で、都会の喧噪から十分離れていさえすれば、一種の小王国と化すことができる。……庭を愛する者は、必然的・本質的に閉鎖的(exclusive)なのだ。さもなければ、彼の領土がもつ魔法の魅力は消え去ってしまうだろう。それはイボタノキやツゲの垣根で四周を囲われた(fenced around)小さな土地であってもよい。……(5)

ともかく彼だけのものでなければならぬ。(6)

要するに、貧しくつましい、閉ざされた、さらには過去志向的なコテージ・ガーデンこそが、イングリッシュネスの典型

とされているのである。

しかしこれは、前の世紀に主流だった考え方とはほとんど逆行する。すなわち十八世紀、正確にはその後半にあっては、自然風の開かれた庭、風景式庭園 (landscape garden) こそが、イングリッシュネスの典型とされたのであった<sup>(7)</sup>。事実、周知のとおりそうした風景式庭園こそが、「イギリス式庭園」(the English garden)、すなわちイングランドを代表する庭園と呼ばれることになるのである。

たとえば、十八世紀後半の代表的文人、ホレス・ウォールポール (Horace Walpole, 4th Earl of Oxford, 1717-97) が書いた、イギリス風景式庭園にかんする (事実上) 最初の、最も標準的な歴史書をみてみよう。ウォールポールによれば、風景式庭園の誕生とは、旧来の整形形式庭園における囲いを撤廃し、庭園をその周囲の自然・田園へと開くことに他ならない。

後続するすべてのものへの最大の一撃、最初の一步は、境界の壁を壊し、堀〔いわゆる「ハハ」(ha-ha: 隠し堀)〕を発明したことである。……かくて彼〔＝風景式庭園の創始者とされるウイリアム・ケント William Kent, c. 1685-1748〕は、柵を飛び越え、自然の全てを庭園と見た。……壁を取り去った結果、あらゆる改良された土地 (improvement〔＝庭園等〕) は開かれ、どこを通っても、次々に続くいくつもの絵の中を通っていることになる。……開かれた田園は、〔庭園という〕風景画を描くための一つのキャンパスに他ならない。<sup>(8)</sup>

しかも、当時「改良」(improvement) の語が造園を意味したことからもわかるように、この庭園観は、ウィーダとは反対に、明らかに未来を志向している。近い将来、イギリスの全土が開かれた庭になると言われているのである。

またウォールポールは別の書物で、風景式庭園がイギリスの「オリジナル」な発明品であり、「イングリッシュなものであることに異論の余地はない」という、当時繰り返される主張を行っている<sup>(9)</sup>。彼によれば、このように風景式庭園が開

かれていることは、イギリス独自の自由な「憲法政体」(Constitution)の産物に他ならない(Satirical Poems, pp. 44f.)。彼はさらにいう。

われわれ「イングランドに住む者」は、世界に造園の真の模範を与えた。他国には、われわれの趣味を猿真似したり、墮落させたりしておけばよい。しかしわが国では、この趣味を緑の玉座に着かせ、統治させよ。それはみずからの優雅な純粹さによって、オリジナルなものである。(History, p. 277)

イギリスこそは世界における造園の中心であり、他国はそれに不完全な形で追随するしかない。——同時代のイギリスの帝国主義的な拡大とも並行するこの主張の含意は、十八世紀の末には、(フランス革命への反動から来る国粋主義の高まりとともに)いっそう顕在化することになる。すなわち一七九三年、スティール(Richard Steele, fl. 1790s)は、ウォールポールの文章を無断借用している。

おもうに、この島「ブリテン島」でわれわれは今や造園の真の模範を発見し、他国に掲げ示している。他国には、趣味を猿真似させておこう。ちょうど彼らが、自由を猿真似するように!! しかしわが国では……ブリテンが純粹優美な優雅さにおいて、勝ち誇り統治するようにせよ! [強調原文](10)

イギリスは自由な憲法政体の国であり、だからこそ庭園を外部へと開き、風景式庭園を発明することができた。しかもこの風景式庭園は、今やイギリスの自由とともに、海外にまで覇権を拡大しようとしている。

大まかに概括すれば、十八世紀イギリスの庭園観は、開放を目指し、拡大主義的、未来志向的であり、そこにこそイング



リッシュネスが存した。しかし十九世紀末までに、このヴェクトルは反転するようにおもわれる。すなわち閉ざされた、過去志向的なコテージ・ガーデンこそがイングリッシュネスの典型となるのである。こうしたイングリッシュ・ガーデンの開放から閉塞への内向については、たとえばクローフォードの研究がすでに指摘している<sup>(11)</sup>。

ここで興味深いのは、十八世紀半ばから十九世紀末にかけて、国家としてのイギリス（ないしブリテン）そのものは、むしろ逆に、帝国主義的な拡大を続けたことである。国家は拡大し、庭園は閉塞する。この逆行する両傾向は、実は互いに連関したものであった。クローフォードは、一般的な形でそう主張する。

他国を併合しようと駆り立てられる中で、ブリテンは、みずからの牧歌的な空間を外国からの汚染に曝すという危険に陥った。……商業と交易のお陰で、拡大が可能となった。しかしそのことによって、国の表皮は否応なく引き伸ばされ、薄く透け、外からの汚染に犯されやすくなる。そうした国民的感覚が増大したのである。……この国民の不安を目に見える形にしたのが、閉塞の諸形態であった。それは事態を現実に改善したかどうかは別としても、イングリッシュネスを定義する需要が高まる中で流通していった。(Crawford, op.cit., p. 36)

おそらくその通りなのであろう。実際、別の研究者も、イングリッシュネス一般にかんじていう。「近代イングランドにおける最も逆説的だが明らかな事実は、国家の拡大と中心へと向かう動きとが、同時に起こったことである」<sup>(12)</sup>。しかし帝国の拡大と、庭園などの閉塞とが互いに連関するといった、こうした〈大きな〉命題は、実証するのがきわめて難しい。クローフォードの研究にしても、この点にかんする実証は全く不完全なままである。

同様のことは、庭園史により特化したヘルムライクの実証的研究にも指摘できよう。彼女は、十九世紀末から二十世紀初頭にかけて、コテージ・ガーデンを含む庭園が、イングリッシュネスの典型的なアイコンとして機能したことを、多くの資

料によって示した。とはいえ、「庭園は、耕作＝陶冶(cultivation)」と植物展示にささげられた閉ざされた場所として、特定の民族集団に割り当てられた囲われた領土としての独立国家という考えを映し出す鏡となった」、といった形で彼女が一般化する<sup>(13)</sup>とき、やはりそれは直接的な証拠を欠いているようにおもわれる<sup>(13)</sup>。

本稿は、大きな問題設定の枠組みにかんしては、上記の研究と関心を共有するものである。しかし、まずは焦点をコテージ・ガーデンについての同時代の言説に絞り、それを十八世紀にまでさかのぼって詳しく検討する。十八世紀後半から十九世紀末まで、コテージおよびコテージ・ガーデンにたいしては、きわめて多くの言説が現われた。本稿では、ともかくまずそれらを丹念にたどることによって、「開放・未来志向から閉塞・過去志向へ」という、庭園におけるイングリッシュネスの内向が、実は様々なタイプの言説編制が交錯する、長く複雑な歴史的過程の産物であったことを詳説したい。

同時に本稿は、これまで十分になされてこなかったコテージ・ガーデン研究の欠を補おうとするものである。なるほど、コテージの建築<sup>・</sup>そのものについての研究はあるていどなされてきたし、本稿でも、当然必要に応じてコテージそのものをも考察することになる<sup>(14)</sup>。しかしそれに付随するコテージ・ガーデン<sup>・</sup>については、テーブル・ブックやデザイン集の類は無数にあるものの<sup>(15)</sup>、通史的な研究は、管見の及ぶかぎり、一九八一年のスコット＝ジェイムズのものしかない<sup>(16)</sup>。それも学問的研究というよりは、私的な読み物としての性格が強く、当然、近年の文化史研究の成果も取り入れていないのである<sup>(17)</sup>。むろん十八世紀から十九世紀末までのコテージ・ガーデンに視野をかぎっても、それをめぐっては膨大な数の一次文献が存在する。さらに、たとえばすでに冒頭で引いたウィーダの一文だけを見ても、この問題には貧民、階級、植生、所有、ピクチャレスク、そして(それ自体複雑な)イングリッシュネス一般といった極めて雑多な要素が含まれていることが予想される<sup>(18)</sup>。それゆえ本稿も、あくまで暫定的な報告にとどまることはいうまでもない。

## 一 十八世紀半ばまでのコテージ——貧しさの象徴

イギリスにおいてコテージそのものは、おそらく青銅器時代からあり、遅くともローマ時代にはその存在を示す考古学的証拠がみられるという<sup>(19)</sup>。とはいえ十八世紀の半ばにいたるまで、コテージやコテージ・ガーデンに坎する積極的な言及は決して多くない<sup>(20)</sup>。もともと「コテージ」の語には、否定的ニュアンスが強かった。代表的な例として、広く読まれたサミュエル・ジョンソン (Samuel Johnson, 1709-84) の『英語辞書』(二七五五年) による定義を挙げよう。

コテージ……。小屋 (a hut)、みすばらしい住まい、コット、小さな家のこと。……法律用語でいうコテージの住人 (collager) とは、入会地に住む人のことで、家賃を払わず、自分の土地をなんら持たない人のことである。<sup>(21)</sup>

続けてジョンソンは、例文としてフランス・ベーコンの『ヘンリー七世の御世』(一六二二年) から次の言葉を引く。「単なるコテージの住人とは、家をもつ乞食にすぎない」。

コテージにまつわるこの否定的なニュアンスは、十八世紀の末以降、上・中流階級向けに建てられた「装飾的コテージ」(後述) のパターン・ブックにさえ感じられる。たとえば一七九三年公刊のパターン・ブックには次のようにある。「コテージは、田園の貧人が住むものである。それはおもに貧弱な材料によっており、彼ら自身の技術と労働で建てられることも多い。コテージは必要の産物にすぎず、なんら規則に従わない」<sup>(22)</sup>。

古いイギリスのコテージに、時に付属する庭が造られたことは、すでにチャーサーの『カンタベリー物語』(一三八六—八七年) などからも明らかである。それらはもちろん、ほとんどが実用の「菜園」であったであろうが、しかし時として美的なものにもなりえた。たとえば、ウアリッジ (John Worlidge, 1640-1700) は一六六七年出版の『造園大鑑』で次のよう

に述べる。

「庭というものは」きわめて優れているので、イングランド南部のほぼすべてにおいて、相応の庭をもたないコテージはまれである。ほとんどの人びとは庭を大いに楽しむ。その結果、自分が育てた花やハーブや木の姿を楽しめるだけではない。さらに結婚式や祭りや葬式といった特別の折には、自分の庭で取れたものを、自分や隣人に与えるのである。<sup>(23)</sup>

この時代までの同様の例は他にも挙げられるだろう<sup>(24)</sup>。しかし、コテージ・ガーデン（あるいはガーデン内のコテージ）についての積極的な言及がにわかに多くなるのは、十八世紀半ばを過ぎてからのことである。

#### トムソン——イギリスの繁栄と障害としてのコテージ

ここで、そうした十八世紀後半の新しい動きにみられる主要傾向を予め示すようにおもわれる、世紀前半の重要な例を分析したい。トムソン（James Thomson, 1700-48）の名高い詩、『四季』（*The Seasons*, 1726）である。以下で取り上げる箇所（一七四六年版のもの）は、かならずしも庭園に直接言及しているわけではない。しかしそれは、帝国の拡大とコテージへの内向との二つを結びつけ、さらには後の展開をも予示するものとして、本稿にとって重要な示唆——たとえ詩的なものにせよ——を含むようにおもわれる。

一般にトムソンはすぐれた眺望を描写することで知られる。この箇所でも彼は、テムズ川沿いに散らばる同時代の重要な地所を遠望し、列挙する。

ここで限界のない風景〔画〕を見渡そう。気高きハロー……偉大なウインザー……ハリントンの隠棲所……ハンプト

ンの王家の館……クレルモントの高いテラス、そしてエシャーの木立。……なんという素晴らしい眺望 (prospect) が開けゆくことか。丘があり谷があり、森があり芝地があり、尖塔が見える。街がきらめき、川が輝く。この広がりゆく風景の全てが、終には煙の中へと消えゆく。<sup>(25)</sup>

こうしたあたかも無限に開かれゆく眺望への感性が、(先にウォールポールが記述していたような) 風景式庭園の誕生と通底するものであることはいうまでもない<sup>(26)</sup>。

同時に、この眺望の記述は、デナム (Sir John Denham, 1614 or 15-69) の『クーパーの丘』(Cooper's Hill, 1642) や、ポープ (Alexander Pope, 1688-1744) の『ウィンザーの森』(Windsor-Forest, 1713) の伝統に連なる、高度に政治的なものでもある。すなわち、これらの列挙された地所は、全体としてイギリスの繁栄を示す提喻に他ならない。だからこそトムソンは、すぐに続けてイギリスそのものを賞賛し、終にはイギリスによる帝国主義的な海外制覇をも予言することになる。

至福の島 (ブリテン) よ! その臣下たる四海は、汝の磯浜の周囲で唸りをあげ、彼方の国々の脅威、恐怖、喜悅を同時に引き起こす。それらの国々の最も遠くの海岸も、やがて汝の海軍によって揺るがされることだろう。(II. 1595-99)

開けゆく風景が、やがてはイギリスによる海外制覇にいたる。この修辭的な構造は、先に見たウォールポール／ステイールの風景式庭園論でも繰り返されていたものであった。

ここで興味深いのは、この外向するヴェクトルが、国の内なるコテージにも向けられることである。

幸いなるかなブリテン！ ここでは諸芸の女王である自由が、活力を鼓舞しつつ、広く(abroad)闊歩する。この自由は閉じ込められることなく(unconfined)、最も遠くのコテージ(cots)にさえいたり、物惜しみしない手で豊穡をばら撒く。(II. 1442-45)

先の引用における海外諸国の「最も遠くの海岸」(remotest shore)と、ここでの国内の「最も遠くの〔辺鄙な〕コテージ」(farthest cots)という、二つの最上級の照応に注意してもよい。帝国が最も遠い外部へと開けゆくことができるならば、当然その「自由」の「活力」は、「閉じ込められることなく」、国の最も深い内奥まで貫徹していなければならない。ここにおいて海外へと拡大しゆく帝国主義的な欲望と、国内のコテージへと内向する改良の期待とは、ともにイギリスの国力を反映するものとして、(未来に実現されるべき予定調和の形で)重なりあっているといえよう。

しかもこれら照応しあう二つの最上級が示唆するように、海外の遠隔地と、国内の奥深くにある貧しいコテージとは、繁栄しゆくイギリスにとって、ともに最も征服しがたいもの、最も厄介な障害であるとされている(だからこそその克服が、イギリスの自由の活力をいっそう強力に示すことになるわけである)。さらに、「最も遠くのコテージにさえ(even)」という言葉づかいに注目してもよい。逆にならば、通常、コテージは自由の恩恵を最も受けがたく、「豊穡」からは最も程遠い、典型的に厄介な存在であると考えられる。

かくして、風景式庭園の誕生とも通じ、イギリスの帝国主義的な拡大とも通ずる、無限に開かれゆく眺望への感性にとつて、コテージは障害となりうる。しかし、もしもイギリスの自由が真に国内・外へと拡大・貫徹し、さらには風景式庭園が真にその豊穡を寿ぐものであるならば、このコテージ——「田園の住まいを代表する典型」(27)——における貧しさの象徴は克服されねばならない(28)。実際、十八世紀の後半以降、イギリスのコテージ(・ガーデン)をめぐる複雑な言説の展開は、トムソンが予示したこの障害の克服(そしておそらくはそれによる帝国の拡大と内向との調和)を軸として整理でき

るようにおもわれる。その輪郭を予備的に描けば次のようになろう。

十八世紀後半、コテージは、まずは風景式庭園をめぐる言説の中で盛んに論じられはじめる（以下の二）。風景式庭園においてコテージというこの（潜在的な）障害は、さしあたり二つの仕方で克服されよう。第一に、コテージを庭園の眺望から排除してしまうこと。第二に、むしろコテージを美化して、庭園へと取り込むこと。とはいえ、この障害を根本的に解消するには、当然、風景式庭園というジェントリの美的世界を離れ、農民が実際に住む、庭園外部の現実世界における真正のコテージをも改良せねばならない（これは一般化すれば救貧の問題となる）。それゆえ、風景式庭園内部のコテージをめぐる言説群にすぐに続けて、博愛主義的な現実のコテージ改良についての多量の言説が、十八世紀後半に出現することになる（以下の三）。その中で、ガーデン（風景式庭園）の中に取り込まれたコテージだけではなく、現実の独立したコテージに付属するガーデン（本来の意味のコテージ・ガーデン）もまた論じられることになるのである。しかし、ジェントリによる風景式庭園内部の美的なコテージと、現実の貧民が住む改良された実用的・非美的な博愛主義的コテージ（・ガーデン）との二系列は、並行して展開しつつも、実際には軋轢を含みつつ交錯する。そこで、両者を調停する試みがなされることになるだろう（以下の四）。以下、これらの言説を順に検討したい。

## 二 風景式庭園における排除と美化——ジェントリのガーデンの内部

### コテージの排除

障害としてのコテージにたいする第一の単純な対処法は、そのような目障りな対象をそもそも眺望から排除してしまうことである。実際、風景式庭園がその外部へと開かれてゆけば、地所にある貧しいコテージは、必然的にその眺望の中に入らざるをえない。その結果、実際にいくつかのコテージが、ジェントリによって排除されたことが知られる<sup>29)</sup>。

中でも有名なものは、後にルソーも滞在することになる風景式庭園、ニューナム・コートニー (Nuneham Courtenay, Oxfordshire) である。そこでは、第一代ハーコート伯爵 (Simon Harcourt, 1st Earl Harcourt, 1714-77) が、一七六〇年代に古い村を壊して移転し、新しい村——いわゆるモデル・コテージ——を建てた。桂冠詩人のホワイトヘッド (William Whitehead, 1715-85) はそれを讃えて歌う。

その平地の夫人たちは、心配が多いにもかかわらず、自分のコテージ (cots) を離れても、ため息一つ漏らさなかった。そして自分の一家を、もっと幸せで、暖かく、乾いた住処に喜んで住まわせたのである。<sup>(30)</sup>

ホワイトヘッドはハートコート伯爵の息子の家庭教師であり、ここには追従が含まれているかもしれない。いずれにせよ、この詩の行間からも推測されたとおり、一般にコテージを排除することは、農民の多大な犠牲を強いるものであった。それゆえ、この種の排除にたいしては、ゴールドスミス (Oliver Goldsmith, 1730 or 28-1774) の『廃村』 (The Deserted Village, 1770) に代表されるような、厳しい批判がなされることになる。周知のとおり『廃村』は、まさに風景式庭園によって排除された農民の悲惨を嘆く詩であった<sup>(31)</sup>。

### 庭園への取り込み——ウェイトリ

とはいえ、十八世紀後半のイギリス風景式庭園 (論) で主流となるのは、こうした犠牲や批判を引き起こしうるコテージの排除ではなく、むしろそれを庭園の中に一種の美的な対象として取り込み、その障害をいわば中和化してしまうという方策であった。すでに一七五〇年代にはそのような実例が見られるというが、言説のレヴェルでは、後述するシェンストンのもの (一七六四年出版) が比較的早い重要な例といえよう。ここでは、それにかんしまった記述をしている、やはり初



期の重要な例として、ウェイトリ (Thomas Whately, d. 1772) の風景式庭園論 (一七七〇年) を取り上げたい<sup>(32)</sup>。

ウェイトリの庭園論は仏訳もされ、影響力の強いものだったが、その中で彼は、風景式庭園の装飾、特に田園的な景觀の飾りとしてのコテージの建設を提案している (pp. 119, 124, 130)。たとえば、次のような案である。

野原では単に粗いだけの土地も、それが村の場所だということ、ロマンティックに見える場合が多い。村の建物や他の事象があるおかげで、不規則性が際立ち、増すからである。そうした外観を強めるために、傾斜地の端にコテージを置くのもよい。そして未加工の踏み石を、そのドアのところまで蛇行させる。あるいは、くぼ地にコテージを置いてもよい。そしてその上に、付随する小道具を垂れかけさせるのである。(p. 231)

ただしここでもコテージは、障害としての性格をかならずしも完全には中和化されていない。すなわちウェイトリは、一般に農業が領主の館の近くに来ることを避けるべきだとしており、また右のコテージにしても、あくまで景觀の飾りとして、ライディング (馬車道) の途中に置かれるべきものにすぎないのである。つまりそこには、排除ではないにせよ、一定の距離化が働いている。そして当然のことながら、このコテージは現実の真正な農民のコテージではない。

たしかにウェイトリにおいてコテージは、他の様々な庭園建築物、いわゆる「フォリー」(folly) とは、若干違う性格——イングリッシュネスといってもよい——を有するようにもおもわれる。彼によれば、たとえば、「ギリシャの寺院、トルコのモスク、エジプトのオベリスクやピラミッド、外国から輸入したもの、普通でないもの」といったフォリーは、イギリス風景式庭園の中では、明らかに「現実はその場に属しえない建物」であるが (p. 120)、それらとは異なり、コテージであれば、イギリスの地に現実存在しうる。それゆえウェイトリはいう。景觀の单调さを破るという目的のためにコテージを導入する場合、

意図があらわになってはならない。この目的のためにコテージを用いることの利点は、コテージならばだれ一人疑わな  
い点にある。そして傍らに木を二三本植えれば、この対象「コテージ」を拡大もでき、その位置を示すこともできるだ  
ろう。(p. 119)

とはいえ、ここでの要点はあくまで「意図をあらわに」しないこと、「疑い」を生じさせないこと、つまりイリュージョン  
を効果的に立ち現わさせることにある。木を植えてそれを強調するのも、単にその外観が重要だからであろう。ウェイトリ  
は典型的な庭園のイリュージョンリストであり、イリュージョンさえ確保されれば、「ギリシャの丘でも中国風のものでも、  
あらゆる種類の建築が許容される」(p. 120)とする。またギリシャ寺院にせよゴシック寺院にせよ、その元来の使用法は  
無視すべきだもという(p. 117)。実際、コテージの景観にしても、古代ギリシャのアルカディアの景観など、非イギリス  
的なものと単に並列されているにすぎない。要するにコテージのイングリッシュネスは、ただイリュージョンを効率的に搔  
き立てるために有利な手段にすぎないのである。それは庭園の美的世界に取り込まれた単なる装飾であり、その真正性、歴  
史性、イングリッシュネスは、なるほど無視されてはいないにせよ、いまだ前景化されてはいない<sup>(33)</sup>。

### 装飾的コテージの流行

ウェイトリにあっては、コテージ自体をどのような形で設計すべきか、かならずしも明確に述べられてはいない。だが、  
庭園にコテージを取り込み、障害としてのその性格を克服するのであれば、コテージ建築そのものを美的に改良するのがいっ  
そう効果的であろう。実際、庭園(あるいは地所)の中に置くためのそうした美化されたコテージ、当時の用語でいう「装  
飾的コテージ」(cottage orne<sup>34</sup>ないし ornamented cottage)は、特に一七八〇年代以降のイギリスで大きな流行をみる。  
そしてそれをめぐっては、多量の言説が費やされることになるのである。

クラウリーによれば<sup>(35)</sup>、一七八〇年以前、「コテージ」の語を冠したイギリスの書物が出版されたのは、一年に一回以下であった。ところが一七八〇年から一八〇〇年の二十年間、それは百冊以上も出版されることになる。また建築にかぎれば、一七八〇年以前、「コテージ」がタイトルに付いた書物は皆無であった。しかしその後、一八〇〇年までの二十年間、少なくとも十七冊が出版されたという。本稿にとって特に重要なのは、当時大量に出版された、庭園や地所のための「装飾的コテージ」のパターン・ブックであろう。

それらパターン・ブックのすべてを取り上げることとはよりできないが<sup>(36)</sup>、比較的初期の例として、農業関連の著作で名高いウィリアム・マーシャル (William Marshall, 1745 or 50?-1818) の『植栽と装飾的造園』(一七八五年・第二版一七九六年) を瞥見しよう<sup>(37)</sup>。ここでも先のウェイトリと同じ傾向がみられる。すなわち、なるほどマーシャルのパターン・ブックでは、コテージの周辺で外来植物を排除し、「土着」の植物のみを用いることが説かれている(p. 611)。そのかぎりでは、コテージのイングリッシュネスは意識に上っているといえよう。しかしこのコテージは、あくまでヴィラや母屋と並列される一つの美的な要素にすぎず、もちろん真正のイギリス農民のものではない。それは教養あるジェントリ(土地所有階層)に快い息抜きを与える、庭園の単なる一装飾なのである。

要するに装飾的コテージは、洗練さの最初の段階にあるような耕作＝陶冶された自然を示すべきである。……それは陶冶された精神にたいして、田舎じみたものを快くしてくれる、あの適切な清潔さと家庭的な便利さのみを目指すべきなのである。(ibid.)

ここからすれば、コテージ周辺の植栽のイングリッシュネスもまた、単に庭園全体の美的効果をあげるための一手段として要請されているにすぎないといえよう。

コテージのイングリッシュネスが特に前景化されていなかったことは、この種の装飾的コテージが、多くは「cottage orné」というフランス語で呼ばれたことから推測される。事実、同種のパターン・ブックの一つ、その名も『装飾的コテージ (Femme Ornée) あるいは田園の改良 (『風景式造園』(一七九六年)では、コテージの壁の作り方にかんして、フランスの進んだ方法を導入することが説かれている<sup>(38)</sup>。さらには同書では、アメリカ式のコテージ (p. 7)、あるいはコテージ・スタイルのヴィラ (p. 8) などとも推奨される。そこからしても、コテージのイングリッシュネスや真正性が問題になっていないのは明らかである。

このような装飾的コテージは、実際にいくつも作られ、ジェントリが使用したり、居住したりすることさえあった。比較早い例としては、ロンドンにある王家の風景式庭園、キュー (Kew Gardens) に今も残る「王妃のコテージ」(Queen's Cottage, 一七七四年以前)を挙げることができよう<sup>(39)</sup>。あるいは、「ランーゴレン」[アイルランド]の夫人たち「(Ladies of Llangollen) として有名だった、バトラーとボンソンビー (Lady Eleanor Butler, 1739-1829, and the Honourable Sarah Ponsonby, 1755-1832) の庭園<sup>(40)</sup>におけるコテージのように、イギリス風景式庭園に影響されたルソーの『新エロイズ』(一七六一年)の庭園描写から、さらに逆に影響された例もある。彼女たちは、この庭園で五十年以上、典型的に「ロマンティックな」(おそらく同性愛的でもある)生活を営んだという<sup>(41)</sup>。ここでもコテージが、特にイングリッシュなものと考えられていないのは明らかである<sup>(42)</sup>。

#### 流行の背景——ブリミティヴィズムと家庭的理想

こうした装飾的コテージがなぜ大流行したのか。原因は様々に考えられよう。もともと牧歌的な建築や意匠を庭園に取り入れることは、すでに風景式庭園誕生以前から長く見られた伝統である。また一般に農業を取り入れることも、風景式庭園誕生のきわめて重要な誘因であった<sup>(43)</sup>。そうした文脈の中で、(たとえばトムソンにおいて示唆されていたような)農村

のコテージがもってしまう障害としての性格を克服すべく、ジェントリはそれを美的に改良したと考えることができる。

さらに、十八世紀後半におけるコテージ流行に固有の要因として、建築における普遍主義的なプリミティヴィズムを挙げることでもできる<sup>(4)</sup>。フランスのロージェ (Marc-Antoine [Abbe] Laugier, 1713-69) は、その建築論でウィトルウィウス的な原初の「田園の小屋」(la petite cabane) を復活したことで名高いが<sup>(5)</sup>、その後、イギリスでもこの話題は盛んに議論することになった。たとえば、ロバート・モリス (Robert Morris, 1703-1754)、『チェインバーズ (Sir William Chambers, 1723-96)』アイザック・ウエア (Isaac Ware, 1704-66)、『ジョン・ソーン (Sir John Soane, 1753-1837)』といった人々によってである。そうした文脈にあってコテージは、人間の根本的な欲求に根ざした、最も原理的かつ簡素な建築に近いものとして好まれることになる。その種の建築を復興する実験は、もともと遊戯的なフォリーの多い風景式庭園において行うことが最も容易だったと想像される。またここからすれば、コテージはむしろ普遍主義的なものであり、特定の国民性(たとえばイングリッシュネス)に結び付かなかったとしても当然であろう。

もう一つ、この時期の風景式庭園における装飾的コテージ流行の大きな要因と考えられるのは、当時の公共性一般の在り方の転換、およびそれと庭園との関係である。もともと風景式庭園は、十八世紀初頭、半ば公共的なものとしてジェントリが生み出したものであった。しかしそうした公共性への志向は、世紀後半にはみられなくなっていく<sup>(6)</sup>。他方、ハーバース以来指摘されてきたとおり、十八世紀の末になると、一般に家庭の親密圏が公共性を離れていっそう内向し、愛の共同体としての家庭が理想とされることになる。この家庭的な理想は、なるほど元来は中流階層、「ブルジョワ」市民的(bürgerlich)な出自のものであったとしても、身分の枠を超え、ジェントリにも浸透してゆく。この転換が、風景式庭園の中における装飾的コテージ流行をもたらした一因と考えられるのである。

実際、先のマールシャルからの引用にもみられた通り、これらの風景式庭園の中で造られる装飾的コテージのパターン・ブツクにあっては、しばしば「家庭的」(domestic)ということが強調される。あるいは、いっそう明白なモルトン (James

Malton, 1761-1803) の例 (一七九八年) を引いてもよい。

成熟した眼は、けばけばしい壮大さに飽きてしまう。そして華美な建物、きれいな芝生の斜面、見事に屈曲した運河、規則的な塀、整形的な並木といったものから、嫌悪をもって立ち去る。成熟した眼は逆に、簡素なコテージ、荒い入会地、粗野な池、野生の生垣、不規則な植栽を眺め、名状しがたい喜びを感じる。幸いなるかな (Happy he!)、真の幸福が、喧噪や雑踏や儀礼とは違うことをいち早く知る者よ。自身の家庭的な勤めをきちんと果たすことに、幸福の中心を求める者よ。そして親の優しさでもって、子供の養育に早くから満足の種を撒き、その結果、人生の秋に喜ばしい収穫を行う者よ。(47)

ここで「幸いなる人」(beatus ille) というホラティウスの隠遁のトポスが用いられ、また整形式庭園にたいする伝統的な批判が繰り返されていることが示すとおり、この種の言説はけっして全面的に新しいものではない。しかしながら、十八世紀末以降の装飾的コテージ流行の背景に、こうした親密な家庭的理想の浸透があったことは明らかであろう。たとえば十九世紀初頭、『イングランドの田園生活』(一八三八年) を書いた作家ホーウィット (William Howitt, 1792 -1879) も、「富と趣味を備えた人々のコテージ」ないし「装飾的コテージ」について次のようにいう。

この国の貴族的な諸制度につきものの面倒な仰々しさや周りくどさ。それを感じるにつけても、政治生活の論争から遠く離れ……息抜きと幸福の感覚を湛えた、こうした甘美な隠遁所(「装飾的コテージ」)のことがおもわれるのである。(48)

そしてモルトンにみられるような、こうした喧噪の公共性から隔離されたコテージと、愛や生殖とを結びつける思考方は、身分の枠を超え、コテージ・ガーデンをめぐる言説の中で長く繰り返されることになるのである（なお上のモルトンの引用で、閉塞を暗示する「生垣」が、積極的な美的観賞の対象となっていることも、後の動きを暗示するといえるかもしれない）。

### 三 博愛主義とアロットメント——現実のコテージ・ガーデン改良

以上みた装飾的コテージは、基本的にはジェントリが自分の庭園（ないし地所）の内部に取り込んだ、装飾のための一つの点景にすぎなかった。したがってそれは、あくまでガーデンの中のコテージなのであって、かならずしも独立したガーデンをもつ必要がない。実際、装飾的コテージのパターン・ブックにしても、大部分は建物のみを描き、付随する独自のコテージ・ガーデンを描いていないのである。しかし十八世紀後半以降、独立したコテージ・ガーデンの造成につながる、もう一つの重要な動きが存在した。博愛主義、およびそれに支えられたアロットメント運動である。

上で見た装飾的コテージを中心とするコテージ改良は、あくまでジェントリが貧民の生活様式（家庭的理想等）を取り入れるものであり、いわば〈上から〉のものであった。それは基本的に、庭園というジェントリの美的世界、仮象的な擬似現実世界の内部で行われたにすぎない。それゆえそこでは、コテージの真正性や現実性、あるいはイングリッシュネスは、当然ながら（美的効果の単なる手段となる以外）ほとんど前景化することもなかったのである。

それに反して博愛主義とアロットメント運動は、当時広く行われた社会改良運動の一環であり、風景式庭園のような美的世界の外に出て、現実のコテージ（・ガーデン）を改良しようとする<sup>49</sup>。なるほどそれは、他の同時代の社会改良と同様、もともと上流階層の側から発議・実施されたものであった。しかしこの運動は、下層の貧民の生活を、上流階層のそれへと向けて向上することで、障害となるコテージの貧しさを克服しようとするものである。その意味で、これを〈下から〉のコ

テージ改良と呼んでもよいであろう。

以上の二つ、〈上から〉および〈下から〉のコテージ改良は、後に見るように、しばしば交錯することになる（おそらく一般にコテージとは、すぐれてそのような身分の交錯の場であったとおもわれる）。しかし少なくとも言説のレヴェルでは、両者は明らかに異質なものととして展開してゆく。時間的には、前節でみた〈上から〉のコテージ改良の方が若干先行して顕在化したと考えられるものの、十八世紀後半以降、〈下から〉のコテージ改良もまた、並行するもう一つの強力な言説編制を作り上げてゆくことになるのである。

#### 博愛主義的モデル・コテージ——ナサニエル・ケント

この〈下から〉の博愛主義的コテージ改良運動の創始者ともいってよい人物が、農業改良家のナサニエル・ケント（Nathaniel Kent, 1737-1810）である<sup>(50)</sup>。彼はピクチャレスクの美学者でもあったジェントリの一人、ユーヴデイル・プライス（後述）の地所を改良したことで知られる<sup>(51)</sup>。その意味では、〈上から〉のコテージ志向とも無縁ではなかった。しかしケントは、そうした美的要素をまったく欠いた、『土地財産をもつジェントルマンたち（『ジェントリ』へのヒント集）を書く<sup>(52)</sup>。同書は、一七七五年に初版が出た後、翌年に第二版、九三年に新版、さらに九九年にも重版されており、影響力の強い書物であった。

同書でケントは、コテージにかんして多くの頁を割き、同時代の現実の農民が住むコテージの窮状——立て付けの悪さや、特に一家が一つの部屋で寝ること——を嘆く。そしてそれを改良すべく、博愛主義的ないわゆる「モデル・コテージ」の案を提出する（その具体的な改良案を示したものとしてはおそらく最初の書物である<sup>(53)</sup>）。本稿にとって注目すべきは、ここで一種のコテージ・ガーデンとも呼ぶべきものが提唱されていることであろう。具体的には、小規模なコテージの場合、農民に半エーカーの土地を与え、これを野菜、果物、豚に用いさせる（p. 234）。また大きなコテージの場合には、三エー



カーの牧草地を与えるという案である。しかもケントはこの土地を「ガーデン」と呼んでいる (pp. 235f.; ただし後述するように、「コテージ・ガーデン」という呼び名は後に一般化するものとおもわれ、ケントも用いていない)。

こうした改良の結果、障害としてのコテージは、国の支えへと変貌するだろう。ケントはいふ。

われわれはだれしも、馬や、それどころかもっと役立たない動物である犬にさえ気を遣う。そして馬小屋や犬小屋に相当な注意を払う。逆にコテージは、地所の邪魔者であり、障害物だとおもいたがる。しかし実際には、コテージの住人こそが、農業の要なのである。否、コテージ以上に実益のあがるものはない。コテージは地所にとって大変有益なだけでなく、最も豊かな人口の揺籃として、国の最大の支えだからである。

コテージの住人は、疑いなく最も有益な人びとである。彼らはどのような下層民よりも質素に育ち、原始的な暮らしをし、害悪や放蕩を免れている。そして戦争その他、骨の折れる奉仕を支えるのに最適なのである。(pp. 230f.)

コテージは、排除すべき障害などではない。むしろ農村の過疎を食い止め、農業を推進し、質朴で忍耐強い兵士を供給するのである。こうした貧民の理想化<sup>(34)</sup>や、コテージを生殖と結びつける思考法自体は、たとえば先に引いたモルトンの裝飾的コテージのパターン・ブックにもみられた。しかしケントにおいては、それが国家の現実政治に関係づけられている。この種のプリミティヴィズム的、生々権力的な言説は、この後もあくことなく繰り返されることになるであろう。

さらにケントは、約二十年後の一七九四年に出された別の著作において、こうした政治性をいっそう顕在化させることになる。すなわち彼は、大農家がコテージの住人に家畜用の土地を貸し与えることによって、彼らの反乱を予防できるといふ。

この国で、牛や豚を飼うことのできる労働者は、彼を雇う農家にたいしてつねに忠義を尽くす。これは自明のことだ

ある。そうした労働者は、国の共通の利害に関与しているから、騒乱の時でもすぐ反乱に加担したりはしない。その点で、失うものがない人間とは異なる。むしろ彼は、国民の安全を守る鎖の要なのだ。(55)

これは歴史家ポーコックが「シヴィック・ヒューマニズム」と呼んだような、伝統的な共和主義の言説と、発想においては通ずるものである<sup>(56)</sup>。しかし今やここでは、公共的な参与を保証する土地や財産が、労働者にまで与えられようとしている。その背景には、フランス革命の脅威と、それに伴う国内の農民や労働者の暴動の増加があるだろう。この時期以降のイギリスにおける福音主義や博愛主義の高まりが、こうした貧民の反抗運動を懐柔するものであったことはよく知られている。そしてここで示されている反乱防止策としてのコテージ・ガーデンという発想もまた、この後、あくことなく繰り返されることになるのである。

ただし、なるほどケントがこのコテージのガーデンを、イギリス全体の国力増加と関係づけている点は重要であるにしても、このガーデンの姿そのものは、特にイギリス固有のもの、イングリッシュネスを体现するものとは考えられていない。またそもそもこのコテージのガーデンは、厳密に実用(野菜の栽培、家畜の飼育)に限定されており、美的なものではまったくない。ケントは一般に、こうしたコテージが美的である必要はないという。「わたしはコテージを改良・増築して、美しく高価なものにしたいわけではない。どれほど質素であっても、堅固で便利でありさえすればよいのである」(Hints, p. 231f.)。このようなコテージや付随する土地が、後の時代におけるような、イングリッシュネスを体现する美的でノスタルジックなオーラをまとうことは難しいであろう。

とはいえケントにおいてもそうであるように、こうした実用の土地もまた、十八世紀末以降、「ガーデン」と呼ばれることになる(それは英語の「ガーデン」の語的多義性に由来すると同時に、美と実用のはざまにあるコテージ・ガーデン、さらには庭園自体の両義性に由来するともいえよう)。この事實は、やはりコテージ・ガーデンをめぐる後の言説の展開にとっ

て重要であるようにおもわれる。以下では、ケントにおけるような下からの博愛主義的コテージ改良運動から現れた、いわゆる「アロットメント運動」について見たい<sup>(57)</sup>。アロットメント運動は、コテージそのものだけでなく、そうした実用的なコテージ・ガーデンの造成を、十九世紀において強力に推進することになるからである。

### アロットメント運動——「独立」の表現としてのコテージ・ガーデン

「アロットメント」(allotment: 耕作用貸付地)とは、十九世紀には頻繁に用いられた用語であり、土地をもたない人みずから耕作させるため、彼らに割り当て (allot) られた小さな土地の区画をさす。貧民の窮状を改善すべく、彼らにそうしたアロットメントを与えることは、博愛主義的な救貧運動の一環として大きな社会運動となった<sup>(58)</sup>。このアロットメントが、しばしば「コテージ・ガーデン」の名で呼ばれたのである。

アロットメント運動の興隆にきわめて重要な役割を果たした書物として、トマス・バーナード (Sir Thomas Bernard, Bart., 1750-1818) の『タドカスター近郊のコテージとガーデンの記録』(一七九七年)を挙げることができよう<sup>(59)</sup>。同書は、後にもアロットメント運動の中で引用されており<sup>(60)</sup>、とりわけ感動的なものでもある(ただしバーナードは「アロットメント」の語を用いていない<sup>(61)</sup>)。

著者バーナードは、ヨークとリーズの間、タドカスター近郊にある現実のコテージを訪れ、その住人から聞いた話を書き記す。そこでは、以前ジェントリによる囲い込みのせいで暮らしを奪われた労働者が、新たに土地を与えられて、みずからコテージと庭を作っている。バーナードの一貫した主張は、基本的に先のケントのものと変わらない。すなわち、全国のジェントリもこの例にならない、「自由保有権」(freehold)によるコテージとガーデンを貧民に与えよというのである。その際、現行の救貧法や救貧院を批判し、国会による税の免除を望むところに、ケント以上の現実性がみられるといえよう。いずれにせよこの主張は、以後のアロットメント運動の中であくことなく繰り返されることになるものである。

バーナードはケントと同じく、このコテージ・ガーデンが、当時問題となっていた貧民の農村離れを食い止め、国家の利害に関心を寄せさせるようにするという。これも後に盛んに繰り返される主張である。

もしも貧民が頼ることのできる土地を分け与える習慣が広まり、彼らをどうにか誘って、そこから利益を得させるようにできるならば……貧民を自分の教区に結び付け、自分の国の資産と繁栄にいつその関心と関与を寄せるようになるだろう。(p. 6)

本稿にとって興味深いのは、このコテージ・ガーデンが閉ざされていることである。

この細長い土地は、ちょうど「一エーカー」(四分の一エーカー)の広さであり、刈り込んだ生垣で囲い込まれていた(inclosed)<sup>(62)</sup>。そこにはコテージ、リンゴ十五本、スモモ一本、ワイン・サワー・プラム三本、アンズ二本、いくつかのグーズベリおよび赤スグリの茂み、たくさんの普通の野菜、ミツバチの巣箱三つがあった。これが持主の全財産であるのは明らかだった。(p. 3)

なぜこの庭は閉ざされているのか。理由は明示されていない(なお対照的に、この農民を地所から排除した、以前のジェントリによる囲い込みは批判されている)。むしろそこには、作物の生育を保護するといった実理的な理由もあっただろう。たとえば後年の例になるが、アロットメントを推奨する別の書物では、「ある場所が囲われれば囲まれるほど、植物の成長には都合がよい」といわれている<sup>(63)</sup>。さらに外部からの不法な侵入を防ぐことも、実際上は必要だったであろう。アロットメントを推奨するもう一つの後年の書物では、コテージ・ガーデンを囲うことの理由が次のように示されている。

あらゆるコテージ・ガーデンは、壁か柵か生垣でもって適切に囲い込まねばならない。これは秩序を促進するためには絶対必要である。同時に、「所有権」についての奇妙で困った観念をもつ二本足ないし四本足のコソ泥の侵入から、収穫物を守るためにもけっして欠かすことができない。(64)

再びバーナードに戻れば、この引用文で囲い込みのもう一つの理由として挙げられる「秩序の促進」は、バーナードにおいても重要であり、彼は件のコテージ・ガーデンについて、「際立った端正さと秩序が、彼の小さな領地のあらゆる部分の特徴となっていた」(53)といった形容を繰り返している。そこからすれば、バーナードにおけるコテージ・ガーデンの閉塞は、まずは清潔な秩序の表現とみるべきであろう(65)。それが飲酒や怠惰(52)といった、庭園外部の害悪と対比されるのである。

このようコテージ(・ガーデン)を、外部の都会の害悪、公共の喧騒から閉ざされた道徳的な秩序の空間とすることは、すでに上でみた十八世紀末のモルトンのパターン・ブックにも確認できたし、先のケント(66)、さらには下つては、冒頭に引いた十九世紀末のウィーダのエッセーにまで見られる、長く続く定型的な発想であった(むしろ一般化すればそれは、西洋の〈閉ざされた庭〉の伝統全体を連綿と貫くものともいえるが(67))。

このことと関連していっそう重要なのは、コテージ・ガーデンの付与が、住人による土地の個人的所有を実現するというバーナードの主張であろう(上で引いた別の書物でも、コテージ・ガーデンの囲い込みと「所有権」との関係が示唆されていた)。バーナードは、この個人的財産所有が、土地への紐帯の強化、勤勉や道徳的な向上、国家の安寧につながるという。これも基本的にケントを継ぐものであり、かつまた後にあくことなく繰り返される主張である。

自由保有権のコテージとガーデンは、それを所有する者と祖国との紐帯を強める。それだけでなく、彼らのよき振る

舞いを最も確実に保証する。土地財産 (property) をもつコテージ住人は、自己自身および自分の性格をいっそう尊重する習慣を身につけ、いっそう高い人種になるようにおもわれる。さらにそうした小さな自由保有不動産 (freeholds) は、一国の勤勉、道徳、生産を増大することからして、次の点からも考慮すべきものとなるろう。自己自身のガーデンと小さな土地財産をもつコテージ住人は、余暇の時間にさえ、快・勤・勉・の・対・象・をつねに眼前にすることになるのである。逆に、自分の土地財産をもたない者は、怠惰な若者を博打のテーブルに駆り立てるのと同じ不幸・必要・、すなわち仕事の欠如に駆り立てられて、居酒屋 (alehouse) へと向かうことになるだろう。(Bernard, op.cit., p. 11 [強調原文])

貧民に自分自身の土地財産を与え独立させることで、自尊心を植え付け、勤勉と生産、「セルフリスベクト理性的な余暇」を醸成し、その道徳的な振る舞いを規律し訓練する。これは当時の博愛主義的な言説の典型といえよう。そしてバーナードは明確に述べてはいないが、コテージ・ガーデンの閉塞は、おそらくこうした個人的土地所有の表現としてとらえられていたと推測される。実際、先の引用 (p. 3) でも、彼はコテージ・ガーデンを「囲い込む」ことと、所有者の「全財産」を示すことを結びつけていたのである。

バーナードの後、博愛主義的なアロットメント運動は、十九世紀末まで大きな興隆をみせ、相当の実効をあげることになる<sup>(68)</sup>。その中で膨大な言説が費やされることになるが<sup>(69)</sup>、いずれも基本的な路線は、以上のケント、およびバーナードと変わらない。なるほど、それらの言説を構成するのは、大部分は技術的な指南書である。したがってそこのコテージ・ガーデンは、単に実用的なものにすぎず、美的な要素はほとんど見られない(とりわけ初期のものはそうである)。また庭園の閉塞についても、単なる実理的な理由を超えた根拠が明確に述べられているわけではない(この点はすでに示唆した)。さらに、ケントやバーナードでも明らかだったように、コテージ・ガーデンのあり方自体が、過去志向的にイングリッシュネスを体现するものとされるわけではない(そもそもこれらの指南書は、未来に向けた「改良」を提言するものであり、過

去志向とは背反する(70)。

とはいえ、それらの言説の主要論点ないし定型的な論旨のパターンは、本稿にとっても重要とおもわれる。重複を恐れず要約してみよう。——コテージ・ガーデンのアロットメントは、貧民による土地財産の個人的所有をもたらす。それはコテージ住人に、(特に非常時における)生活の糧を与え、彼／女(71)を周囲(たとえば教区による救済)に依存しない、「独立した」(independent)存在にする(72)。そのことでコテージ住人は、勤勉になり道徳的に向上する(73)。同時に、(勤勉が報われるので)みずからの土地と家族にたいする紐帯(attachment)を強める。またコテージ・ガーデンは小さく、住人が隅々まで管理できる。その結果、それはいわば彼／女の勤勉と道徳性を表現した、小さな秩序の空間となる(74)。それが外部の害悪(飲酒・怠惰・浪費等)と対置される。さらにこれらの帰結として、貧民の減少と貧民救済費用の削減(効率的な救済)、すぐれた労働人口の増加、不道徳の除去、騒乱の抑止、ジェントリや社会秩序にたいする尊敬の増加等がもたらされ(75)、最終的には、それがイギリス社会全体の安寧と繁栄に寄与する(76)。

一言でいえば、アロットメント運動におけるコテージ・ガーデンとは、外部の害悪を逃れた、独立と徳を示す秩序の空間である。それが土地への愛着を醸成し、イギリス社会全体に貢献する。このようなコテージ・ガーデン像が、後の言説におけるコテージ・ガーデンの閉塞とイングリッシュネスの内向に、(直接的とはいえないにしても)少なからぬ影響を与えたことは十分に想像できよう(77)。とりわけそれが、コテージ・ガーデンを独立した、非依存的で自己充足的なものとした点は強調する必要がある。たとえば、アロットメントを推進すべく書かれた書物の一つ(一八三一年)はいう。

世界から独立して立ち(stand independent of the world)、自己自身の生活手段を所有し、個人的に使用できること。

これは誇らしい感情である。けれども、必要に迫られて教区の資金に頼るようになると、この感情は完全に破壊されてしまう。……依存は精神をかくも抑圧し、善良で高潔なあらゆる感情をかくも害する。これこそが、ガーデンの土地

「のアロットメント」を推奨する決定的な論拠の一つなのである。(78)

従来のコテージは、装飾的コテージに見られたように、せいぜいガーデン（風景式庭園）や地所の中に取り込まれた、従属的な点景にすぎなかった。それゆえそこには、独立したガーデンはほとんど見られない。しかしアロットメント運動は、コテージ・ガーデンを、このような世界からの個人の「独立」を示すもの——したがって潜在的には閉塞したもの——として前景化させたのである（実際、管見による限り、「コテージ・ガーデン」をタイトルにもつ書物は、上のバーナードのもの（一七九七年）が最初であり、その後、そうした書物は、アロットメント運動の中で急激に増加する。すでにそこからしても、アロットメント運動は、コテージ・ガーデンをめぐる後の言説に少なからぬ影響を与えたと推測されるのである）。

#### 四 美と博愛の亀裂と調停

繰り返せば、以上、貧しいコテージという、イギリスの繁栄にとつての障害を克服する大きな二つの流れ、すなわち（上から）および（下から）のコテージ改良をたどった。前者は、ジェントリの美的庭園世界内に取り込まれた装飾的コテージに代表され、後者は、貧民の現実的救済をめざす博愛主義的アロットメント運動に代表された。

両者をめぐる二つの言説編制は、明らかに互いに異質な流れをなし、少なくとも言説のレヴェルに視野をかぎれば、おおむね平行的に展開したようにおもわれる（それは身分的な断絶からくる言説の棲み分けとも呼ぶべきものであろう）。しかし両者は、同じコテージ（・ガーデン）改良という具体的な社会的事象にかかわるものとして、当然互いに無関係ではありえず、十八世紀末以降、しばしば交錯することになる。そうした交錯は、すでにたとえば博愛主義的アロットメント運動の嚆矢ともいべき上のバーナード（一七九七年）にもみられる。



イングランドのいくつかの部分、特に北の諸州にあっては、貧民の住まいは実に快適である。さらに他の部分でも、公共の精神と慈善とに満ちた個人が、近隣の貧民の住まいを多に改良し、今も改良している場合にはそうである。ピクチャレスクなコテージを林苑 (Park) の周囲に巧みに配置するならば、倒錯的な趣味が専心しているあの場違いなゴシックの城や、小人のようなギリシャ神殿などよりも、ずっと効果的に景観を装飾し活気付けることができるだろう。しかしイングランドの装飾的な建築は、不幸なことにもいつも人が住んでおらず、住むこともできない。(Bernard, op.cit., p. 14 [強調原文])

ここで「公共の精神と慈善に満ちた個人」といわれているのは、土地と林苑をもつジェントリのことであり、その林苑とは、様々なフォリー (庭園建築物) が立ち並ぶ風景式庭園だと考えられよう。その周囲に「近隣の貧民の住まい」、つまり現実のコテージがある。両者は、たとえジェントリが慈善に満ちている場合でも、単に無関係に隣接しているだけで、交錯しない。実は、両者の間には (暗黙の) 線引きがなされている。すなわちジェントリは、風景式庭園の中に美的な建築物を建てるだけで、周囲の貧民の住まいを、よい場合には改良し、悪い場合には放置しているのである。しかしバーナードは、この両者を交錯させるべきだという。具体的には、ピクチャレスクな装飾のコテージに、実際に貧民を住ませよというのである。そうなれば、貧しさの象徴としてのコテージというイギリスの繁栄にとっての障害は、いっそう効率的に克服されるはずであろう。

とはいえ、現実の貧民を装飾のコテージに住まわせることは、身分の混乱を生み、美と倫理とのあいだの軋轢を生じうる。この危険は、すでにコテージを風景式庭園の中で距離化しようとしていた上述のウェイトリにも潜在的にみられた。さらにウェイトリの影響源でもある詩人、シェンストン (William Shenstone, 1714-63) の重要な風景式庭園論 (一七六四年に死後出版) にもその兆しはみられよう。すなわちシェンストンは、現実の労働者が住むコテージを、美的な風景式庭園の中に取

り込むことがもたらしてしまう、ある種の居心地の悪さを吐露している。

コテージが快いのは、一つにはそれが「庭園に」多様性を導き入れるからである。また一つには、静けさが支配するようにみえるからである。そしておそらくは（いささかはばかれるのだが〔*am somewhat afraid*〕）、人間本性のもつ虚栄心からである。

「他人が労働するのを遠くから眺める〔のは楽しい。〕」<sup>(79)</sup>

このコテージは、ジェントリ向きの装飾的コテージではなく、現実の貧民の住まいであろう。それが「多様性」や「静けさ」といった、風景式庭園に典型的な美的「快」の源泉をもたすかぎり、それを取り込むことに問題はない。しかし、現実の労働を美的な観点から見ることは、原理的には非難さるべき「虚栄心」を掻き立てるものであり、倫理的に正しくない。だからこそ「はばかられる」のである。

とはいえ、このような軋轢の可能性をはらみながらも、十八世紀の末以降、バーナードの提言を受ける形で、現実の貧民のコテージ（・ガーデン）を改良し、ピクチャレスクなものにして、美的観照の対象にすることが提唱された。美と実用、装飾的コテージと博愛主義の二つを交錯させるその種の試みを、エヴェレットにならい、「ピクチャレスクな慈善」(*picturesque benevolence*)と呼んでもよいであろう<sup>(80)</sup>。バーナードにおいてこの交錯は、いまだ非現実的な提言にとどまっていた。しかし、十九世紀初頭にかけて書かれたユーヴデイル・プライス (*Sir Uvedale Price, 1747-1829*) のピクチャレスク論においては、それがいっそう現実的なものとして語られることになる。

## ピクチャレスクな慈善——プライス

プライスのピクチャレスク論は、基本的にあくまで美的な風景式庭園を扱ったものである。その意味でそれは、コテージを論じている場合でも、やはりガーデンの中のコテージ、装飾的コテージについてのものと考えるべきであり、そこではアロトメント運動におけるような独立したコテージ・ガーデンはかならずしも論じられていない。とはいえ彼は随所で、ピクチャレスクと博愛主義、〈上から〉のコテージ改良と〈下から〉のコテージ改良とを調停しようとしており<sup>(81)</sup>、その主張は、後のコテージ・ガーデンにかんする論者に大きな影響を与えることになる<sup>(82)</sup>。

プライス自身、ピクチャレスクと博愛の調停が難しいことを認めている。しかし彼は全体として、その可能性についてきわめて楽観的である。一例として、この文脈において最も重要な彼の建築論（一七九八年初出）を引こう。

現実の村を美化し、住民の快適さと楽しみを助長すること。それ以上に、富が自然で気取らない「美的」多様性と「博愛主義的」関心とを生み出す方法はない。……「ここでは」絵画を愛する者と人間性を愛する者とは、ともに喜びと関心のきわめて多くの源泉を見出す。「強調引用者」<sup>(83)</sup>

この美（「多様性」「絵画」「喜び」と博愛（「快適さ」「人間性」「関心」との調停が可能なのは、プライスによれば、もともとピクチャレスクを生み出す媒体である絵画芸術自体が、道徳性への傾きを有するからである。すなわち彼は、古い道徳主義的な美学を再び呼び起こしている。

あらゆる自由学芸は、習俗を和らげ、獐犷野蛮に陥るのを防ぐ。それは正しい。だが絵画芸術ほど、この賞賛を受けるのが正しいものはないとおもう。ゲインズバラの描くコテージやその住人。「人間的」関心を掻き立てるグルーズの

絵。オランダの巨匠の絵に見られる様々な群像や効果。これらを喜んでみたことのある人間ならだれしも、同じような対象や性格を現実に見たとき、絵画を思い出してかならずや付加的な喜びを感じるだろう。おもうに、なんらかの対象を喜んでみるとき（その喜びが野卑で騒然とした感情から発したものでないかぎり）、親切と慈善に向かう心の性向を感じずにいることは難しい。喜びや楽しみを増やすことでこうした性向を生み出すものはなんであれ、どれほど奨励してもすぎることはない。（II. 367）

なお、ブライスにあっても、コテージ（・ガーデン）のイングリッシュネスはやはり問題になっていない。たしかに一般にブライスには、一方で強い愛国主義的傾向がある<sup>（84）</sup>。しかし上の引用からもわかるように、そもそも彼がピクチャレスクのモデルとしている絵画自体が、外來のものなのである。たとえばブライスはいう。「およそコテージ、小村、村、それらのまとまり、木やつる植物との組み合わせについての最も優れた教えは、オランダやフランドルの巨匠の作品から得られる」（II. 34）。その結果、興味深いことに、ブライスのピクチャレスク論では、後にしばしば批判されることになる外來植物の導入が否定されない。たとえば、彼はコテージ等におけるツル植物についていう。

「イギリス自生の」スイカズラ、ブドウ、ジャスミンが〔村の建物〕の上に生えていれば、どんな目でもつねに惹きつけられて喜ぶ。それと同じ美しい効果（それ以上に美しくはないにせよ）は、もっと珍しい外來のつる植物でも生み出すことができる。

単なる珍奇な植物収集家の趣味と、ピクチャレスクな改良家の趣味とが、ここまで調和しうる例はまずない。（III. 354）

ここでも、当時、帝国の拡大と並行して流行した園芸におけるエキゾチシズムと、ピクチャレスクの美学とは、樂觀主義的に調停されている。

もちろん、逆にいえばプライスの樂觀主義の背後には、軋轢の可能性がつねに潜在していたわけである。右の引用でも、外来種にたいするイギリス自生の植物の優位は示唆されており、当時、エキゾチシズムと庭園のイングリッシェネスとの（潜在的）亀裂が存在したことが行間に読み取れよう。実際、さらに一般的なレヴェルにおいて、プライスが主張したぐいとの美と博愛との樂觀的な調停は、同じくピクチャレスクの美学理論家で、プライスの隣人でもあったナイト（Richard Payne Knight, 1750-1824）によって批判されることになる。

林苑（＝風景式庭園）に加えられた田舎風のロッジ、装飾的コテージ、未加工の枝や幹で造った牧歌風の腰掛、門、入り口。そうしたものは、きわめて気取った性格のものとならざるをえない。……というのも、この種のあらゆる対象がもつ現実の（real）性格は、それが現実（really）適合している実用性（use）とかならず符合せねばならないからである。そこに他の性格を与えようとすれば、結局、詐欺の性格しか与えられないだろう。およそ牧夫の小屋や農夫のコテージがもつ本物の（genuine）スタイルを、富裕で贅沢な人々の住まいに合わせようなどというのは不可能だからである。それは、牧夫や農夫の言葉・衣装・風習を、教養ある階層の洗練された言葉遣いに適合させるのと同じぐらい不可能である。（85）

貧民が実際に住む現実のコテージを、風景式庭園における美的なイリュージョンへと解消することはできない。両者のあいだには、抜き差しがたい身分的断絶がある（そしてここですでに、それが明確に意識されている）。それゆえプライスのように、美と博愛主義とを樂觀的に調停することはできないであろう（86）。〔続く〕

- (1) 以下、本稿では英語「garden」の訳語として、基本的に「庭園」を用いるが、小規模なものについては「庭」も使い、さらにコテージに関係するものは「ガーデン」とした場合も多い。
- (2) いずれもイングランドの風景画家。Thomas Creswick (1811-69); John Constable (1776-1837); John Crome (1768-1821); David Cox (1783-1859)。
- (3) Ouida, 'Gardens', *Views and Opinions* (London: Methuen, 1895), p. 48. この引用には、後に言及するピクチャレスク美学の影響、さらには観念連合主義的美学に由来する語法も見られる。なおウィーダは、一八七四年以降イタリアに移住する。この引用の最後の部分にも、そうしたイギリス外部からの視点が感じられよう。
- (4) 本稿では、訳文中においては、原文の「England」を「イングランド」と訳す（関連語もこれに準ずる）。しかし、本文中では慣例にしたがい「イギリス」を、イングランドおよびスコットランド等を含む「ブリテン」全体の意味で用いた場合がある。ただしもともと英語において、「England」の語が「ブリテン」全体を表わすことは、十八世紀以降しばしばみられた。
- (5) 中略した部分でウィーダは、「刈り込んだイチイや華麗なテラスの壁で囲われた壮麗な遊園地」に言及しており、彼女は必ずしもコテージ・ガーデンのような貧しい庭園のみを考えているわけではない。しかし先の引用にもあったとおり、このエッセーを通じて彼女は、この種の豪華で人工的な庭園（さらには公共的な庭園）を一貫して批判しており、この中略部分の趣意もただ〈非難すべき庭ですら閉ざされている〉ことを示す点にしかない。つまりイングリッシュ・シユネスの典型がコテージ・ガーデンにあることは明らかである。
- (6) *Ibid.*, pp. 45f. なお、ここでウィーダが庭園の〈占有〉を重視していることは、後に見るように、当時のコテージ・

- ガーデンをめぐる言説において典型的であった。むろん庭園における占有の重視自体は伝統的なものだが、たとえば十八世紀末から十九世紀初頭にかけて「占有」は、イギリスを代表する造園家・理論家のレプトンによって強調されていた。拙著『イギリス風景式庭園の美学——〈開かれた庭〉のパラドックス』（東京大学出版会、二〇〇〇）、第七章「〈開かれた庭〉の終焉——レプトンにおける十八世紀的プログラムの脱神話化」、二〇九—三六頁参照。
- (7) 拙稿「自然と自由の美的政治学——イングリッシュ・ガーデンの『オリジナリティー』」、『芸術文化』、第5号（二〇〇〇）、三五—四九参照。
- (8) Horace Walpole, *The History of the Modern Taste in Gardening* (1771; 1785; 1827; rpt. New York: Garland, 1982), pp. 263f., 278, 280.
- (9) *Satirical Poems Published Anonymously by William Mason: With Notes by Horace Walpole* (written ca. 1779; Oxford: Clarendon, 1924), p. 42.
- (10) Richard Steele, *An Essay upon Gardening* (York, 1793), p. 132. なおこのスタイルは、一八世紀初頭に活躍した同姓同名の文人・ジャーナリスト (Sir Richard Steele, 1672-1729) とは別人。
- (11) Rachel Crawford, *Poetry, Enclosure, and the Vernacular Landscape, 1700-1830* (Cambridge, U.K.: Cambridge University Press, 2002). さらに十八世紀についてだが、世紀を通じて「眺望」のパラダイムが不透明な閉じた世界のパラダイムに変わり行くことは、ハレルやアンドリュースの研究も指摘している。Cf. John Barrell, *English Literature in History 1730-80: An Equal, Wide Survey* (London: Hutchinson, 1983); Malcolm Andrews, *The Search for the Picturesque: Landscape, Aesthetics and Tourism in Britain 1760-1800* (Stanford: Stanford University Press, 1989). また十八・十九世紀の変わり目のレプトンにおいて、拡大主義的な開かれた十八世紀的風景式庭園のプログラムが終焉することについては、本稿筆者自身かつて論じたことがある（前掲拙著、第七章）。

- (12) Robert Colls, *Identity of England* (Oxford University Press, 2002), pp. 199f. (強調原文)
- (13) Anne Helmreich, *The English Garden and National Identity: The Competing Styles of Garden Design, 1870-1914* (Cambridge, U.K.: Cambridge University Press, 2002), p. 4. ちらにヘルムライクの研究は、他の同種の研究と同様、十九世紀末以前の言説にたいする視点が欠けている。その結果、十九世紀末の言説がかならずしも新しいものではなく、それまで繰り返されてきた常套句を多く含むという事実を軽視しすぎている。
- (14) 特に以下のものが有益であった。Sutherland Lyall, *Dream Cottages: From Cottage Ornée to Stockbroker Tudor: Two Hundred Years of the Cult of the Vernacular* (London: Robert Hale, 1988); John E. Crowley, *The Invention of Comfort: Sensibilities and Design in Early Modern Britain and Early America* (Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 2001), esp. Ch. 7: 'Picturesque Comfort: The Cottage', pp. 203-29; Ann Bermingham, 'The Simple Life: Cottages and Gainsborough's Cottage Doors', Peter de Bolla, Nigel Leask and David Simpson (eds.), *Land, Nation and Culture, 1740-1840: Thinking the Republic of Taste* (Basingstoke and New York: Palgrave MacMillan, 2005), pp. 37-62.
- (15) 比較的充実したものは、Susan Chivers and Suzanne Woloszynska, *The Cottage Garden: Margery Fish at East Lambrook Manor* (London: John Murray, 1990); Christopher Lloyd and Richard Bird, *The Cottage Garden* (London: Dorling Kindersley, 1990); Elisabeth Arter, *Cottage Garden* (London: Charles Lettis, 1992); Sue Phillips, *The Cottage Garden* (London: Comran Octopus, 1994); Taylor and Andrew Lawson, *The English Cottage Garden* (1994; London: Phoenix Illustrated, 1998).
- (16) Anne Scott-James, *The Cottage Garden* (1981; Harmondsworth: Penguin, 1982). これは多くのテーブル・ブックに孫引きされている。
- (17) 本稿の草稿段階では、次の重要な研究を十分に参照できなかった。Karen Sayer, *Country Cottages: A Cultural History*



(Manchester: Manchester University Press, 2000). 同書はコテージとイギリスの国民的アイデンティティの結びつきを通時的に論じており、またコテージ・ガーデンについての章も含む。ただし庭園にかんしては、二次文献に大幅に依存しており、しかもその記述は必ずしも整然としておらず、アロットメントにかんしても、後に挙げるバーチャード (Burchardt) の研究ほどの実証性は求むべくもない。いずれにせよ、同書の研究成果の咀嚼については、今後の課題としたい。

なおきわめて短いものだが、次の論考は、ヴィクトリア朝時代におけるコテージ・ガーデン像の概括として優れてゐる。Gillian Darley, 'The English Cottage Garden', Monique Mosser and Georges Treysot (eds.), *The History of Garden Design: The Western Tradition from the Renaissance to the Present Day* (London: Thames and Hudson, 1991), pp. 424-26.

- (18) ピクチャレスクについては、とりあえず前掲拙著二〇二〇六頁とその註参照。イングリッシュネスにかんする最近の研究は無数にあるが、二〇〇二年までのものについては、Colls, op.cit. pp. 5f.で総括・分析されている。本稿と関係の深い邦語文献としたとえば、塩路有子『英国カントリーサイドの民俗誌——イングリッシュネスの創造と文化遺産』(明石書店、二〇〇三)。

- (19) Cf. Bermingham, op.cit., p. 38.

- (20) 以下、十八世紀半ばまでのコテージ(・ガーデン)の記述については、Scott-James, op.cit.; Crowley, op.cit.によるところが大きい。さらに W・G・ホスキンス(柴田忠作訳)『景觀の歴史学』(*The Making of the English Landscape*, 1955; 東海大学出版会、二〇〇八)、一五七—一六六頁参照。

- (21) Samuel Johnson, *A Dictionary of the English Language* (1755; 6th ed., London, 1785), vol. 1, 'Cottage', 'Cottager', n.p.

- (22) Charles Thomas Middleton, *Picturesque and Architectural Views for Cottages, Farm Houses, and Country Villas* (London,

- 1793; rpt. Westmead, Hants.: Gregg, 1972), p. 1.
- (23) John Worlidge, *Systema Horti-culturae or, The art of Gardening* (1667; rpt. New York: Garland, 1982), p. 5.
- (24) 𐌸𐌹𐌸𐌹𐌹𐌹𐌹 William Langland, *Piers Plowman* (c. 1385); John [or, Jon] 'Gardener' (fl. 1440s), *Feaste of Gardening* (c. 1440; rpt. *Archaeologia*, vol. 54, 1894); 𐌸𐌹𐌸𐌹𐌹𐌹 Thomas Tusser, *Five Hundred Pointes of Good Husbandrie*, ed. Payne and Sidney J. Herrtage (1573; 1577; 1580: London: The English Dialect Society, 1878).
- (25) James Thomson, 'Summe', *The Seasons*, 1746 ed., *The Complete Poetical Works of James Thomson*, ed. J. Logie Robertson (London: Oxford University Press, 1908), II. 1408-29, 1438-41.
- (26) たとえば、風景式庭園の事実上最初の提唱者であるブティンソンの庭園論（一七二二）との類似を考えればよい（前景拙著、第四章参照）。またトムソン自身、別の個所では、実際の風景式庭園の記述を詩に取り入れている。
- (27) John Dixon Hunt, 'The Cult of the Cottage', *The Lake District: A Sort of National Property* (Cheltenham: published jointly by Countryside Commission, Victoria and Albert Museum, 1986), pp. 71-83 (83).
- (28) 十八世紀前半のイギリス風景式庭園論において、貧民や農民の扱いはしばしば論じられる重要な主題であった。重要なものとしては、ポーブ『バーリントン卿への書簡詩』（一七三二年）やギルピン『ストウ庭園を巡る対話』（一七四九年）がある。前掲拙著、第五・六章参照。
- (29) 風景式の庭園ではないが早い例として、一七二二年、Admiral of the Fleet, Edward Russell, 1st Earl of Orford (1653-1727)がChippenham, Cambridgeshireで行った排除が挙げられよう。
- (30) William Whitehead, 'The Removal of the Village at Nuneham', *Harcourt Papers*, viii, 376; cit., Mavis Batey, 'Oliver Goldsmith: An Indictment of Landscape Gardening', Peter Willis (ed.), *Furor Hortensis: Essays on the History of the English Landscape Garden in Memory of H. F. Clark* (Edinburgh: Elysium Press, 1974), pp. 57-71.

(31) Cf. Oliver Goldsmith, 'The Revolution in Low Life', *Lloyd's Evening Post* (1762), rpt. *Collected Works of Oliver Goldsmith*, ed. Arthur Friedman (London: Oxford University Press, 1966), III: 195-98; *The Deserred Village* (1770). この詩および類いの批判にかんしては、前掲拙著一九六—九七頁（および註）参照。

(32) Thomas Whately, *Observations on Modern Gardening, Illustrated by Descriptions* (1770; rpt. New York: Garland, 1982).

(33) さらに、自然風の風景式庭園を推奨するトラスラー『現代造園の要諦』（一七八四年）でも、庭園におけるコテージの扱いはほぼ同様である（同書にはウェイトリ等からの借用が多い）。トラスラーはいう。「大規模の庭園では、広い荒野やわびしい荒地、広大な平野が眺望に入ってしまう。しかしそこでは目を捉える諸対象でもって、その多様性の欠如を補うことができる。この目的に最も適するのが建物である。とはいえ、コテージを置き、周囲に数本の木を植えれば、大きな廃墟よりも自然な対象となるだろう。古いブリテンの記念物を模倣することは、楽しい工夫であるし、出費も少なくて済む。材料にはレンガや木材を用い、表面に漆喰を塗ればよい。庭園ではすべてが装飾に奉げられるから、どのような外国の建築を持ち込むことも許される。ただし二、三個以上を建てることのできる庭園は少ない。実際には、非常に多くの建築が見られる例もしばしばあるのだが。——所有者がどうしてもそれらを建てたいという場合、視界から若干見えなくするのがよい。高い木々で囲ったり、高い木々を背後に置いたりするのである。それらの建物は、正面から見るとよりも斜めから見る方が、かならずやよい効果をあげる」〔John Trusler, *Elements of Modern Gardening: Or, The Art of Laying out of Pleasure Grounds, Ornamenting Farms, and Embellishing the Views round about our Houses* [London, (1784); rpt. New York: Garland, 1982], pp. 58f.）。このトラスラーの真正性やインゲリッシュネスはほとんど問題になっていない。重要なのはあくまで美的な「多様性」「表面」「装飾」、見え方だけである。またコテージの周囲の数本の木にしても、独立したガーデンをなすわけではもちろんない。

(34) フランス語で「cottage」は男性名詞であるから、これは誤用だが、同様に当時流行した「装飾的農園」(*femme ornée*)

との連想からこのように書かれたのであろう。

- (35) Crowley, op.cit., p. 216; cf. Bermingham, op.cit., p. 38; John Martin Robinson, *Georgian Model Farms: A Study of Decorative and Model Farm Buildings in the Age of Improvement, 1700-1846* (Oxford: Clarendon Press, 1983), Ch. 4: 'The Pattern Books', pp. 26-35.
- (36) 以下取り上げられている他のものは、Middleton, op.cit.; Edmund Bartell, *Hints for Picturesque Improvements in Ornamental Cottages, and Their Scenery: Including some Observations on the Labourer and His Cottage* ([1800,] 1804; London, 1806); E. Gyfford, *Designs for Elegant Cottages and Small Villas, Calculated for the Comfort and Convenience of Persons of Moderate and of Ample Fortune* (1806; rpt. Westmead, Hant.: Gregg, 1972); idem, *Designs for Small Picturesque Cottages* (London, 1807); William Fuller Pocock, *Architectural Designs for Rustic Cottage, Picturesque Dwellings, Villas* (1807; rpt. Westmead, Hant.: Gregg, 1972).
- (37) [William Marshall], *Planting and Ornamental Gardening: A Practical Treatise* (London, 1785).
- (38) John Plaw, *Freem Ornée: Or Rural Improvements. A Series of Domestic and Ornamental Designs, suited to Parks, Plantations, Rides, Walks Rivers, Farms, &c.* . . . (London, 1796), Advertisement.
- (39) ちなみに早い例として、なるほどロンドンの庭園（現在はキュー庭園の一部）の「隠遁所」（Hermitage）は、むしろ「ペーリンの洞窟」（Merlin's Cave）を模したものがよく知られている。Cf. *A Description of the Royal Gardens at Richmond in Surrey, the Village and Places Adjacent* (1736; rpt. New York : Garland, 1982); Judith Colton, 'Kent's Hermitage for Queen Caroline at Richmond', *Architectura*, 2 (1974), 181-91; idem, 'Merlin's Cave and Queen Caroline', *Eighteenth-Century Studies*, 10 (1976).

- (40) Plas Newydd, Llangollen. 一七八〇年以降。
- (41) Scott-James, op.cit., pp. 29-32.
- (42) さらに、フランスのヴェルサイユ庭園にあるプチ・トリアノンにマリー・アントワネットが造らせた、有名な「アモー (Hamneau : 小集落)」(一七八五年) も、装飾的コテージの例といつてよい。
- (43) 前掲拙著、特に第二・四章参照。
- (44) Cf. Bermingham, op.cit.
- (45) Marc-Antoine Laugier, *Essai sur l'architecture* (1753; 1755; rpt. Genève: Minkoff, 1972), pp. 9f. 同書は特に原初の小屋の口絵を持つ第二版で有名になる。Cf. Jospet Rykwert, *On Adam's House in Paradise: The Idea of the Primitive Hut in Architectural History*, 2nd ed. (Cambridge, Mass.: The MIT Press, 1981), Ch. 3.
- (46) 前掲拙著、第六章参照。
- (47) James Malton, *An Essay on British Cottage Architecture* (London, 1798), pp. 6f.
- (48) William Howitt, *The Rural Life of England* (London: Longman, 1838), II. 140f.
- (49) クラウリーは、この文脈で、「博愛主義的なモデル・コテージというジャンル」という名称を用いている。Crowley, op.cit., p. 216; cf. J. M. Robinson, op.cit. Ch. 13: 'Labourer's Cottages', pp. 107-12.
- (50) もう一人の重要な創始者は、農業にかなする有名な著述家、マーサー・ヤング (Arthur Young, 1741-1820) による。彼については別の機会に譲りたい。
- (51) Cf. Stephen Daniels and Charles Watkins, 'Picturesque Landscaping and Estate Management: Uvedale Price and Nathaniel Kent at Foxley', Stephen Copley and Peter Garside (eds.), *The Politics of the Picturesque: Literature, Landscape and Aesthetics since 1770* (Cambridge: Cambridge University Press, 1994), pp. 13-41.

- (52) Nathaniel Kent, *Hints to Gentlemen of Landed Property* (London, 1775).
- (53) Cf. Nicholas Cooper, 'The Myth of Cottage Life', *Country Life*, May 25, 1967, pp. 1290-93.
- (54) Cf. Cooper, *op.cit.*
- (55) Nathaniel Kent, *General View of the Agriculture of the County of Norfolk. With Observations on the Means of Improvement* (London, 1794), p. 46. なお一七九六年には、同書の再版が出ている。
- (56) Cf. J. G. A. Pocock, *The Machiavellian Moment: Florentine Political Thought and the Atlantic Republican Tradition* (Princeton: Princeton University Press, 1975).
- (57) 以上みたような博愛主義を超えて、大きな社会運動としてのアロットメント運動を生み出した大きな要因は、明らかにフランス革命戦争（一七九二年から一八〇二年）の勃発であった。Cf. Jeremy Burchardt, *The Allotment Movement in England, 1793-1873* (London: Royal Historical Society; Woodbridge: Boydell Press, 2002), p. 12.
- (58) アロットメントにかんする研究は、その必要性が認識されていたものの、本格的研究は、前註のバーチャードのもの（二〇〇二年：Burchardt, *op.cit.*）が最初である。
- (59) [Thomas Bernard] *An Account of a Cottage and Garden, near Tadcaster. With Observations upon Labourers having Freehold Cottages and Gardens, and upon a Plan for Supplying Cottagers with Cows. Printed at the Desire of the Society for Bettering the Condition, and Increasing the Comforts of the Poor* (London, 1797); cf. Nigel Everett, *The Tory View of Landscape* (New Haven: Yale University Press, 1994), pp. 136-45, *et passim*. バーナムは、後述するトーマス・プライスの従兄弟であり、Society for Bettering the Condition and Increasing the Comforts of the Poor (1796-) の長でもあった。この Society にはピクチャレスク美学の創始者ともうけるギルピンも参加している。
- (60) *Account of Britton Abbot's Cottage and Garden; and of a Cottager's Garden in Shropshire: To Which is Added Jonas*

- Hobson's *Advice to His Children: and the Contrast between a Religious and Sinful Life* (London, 1806), pp. 5-23.
- (61) パーチャーズによれば、この意味における「アロットメント」という用語は、一八三〇・四〇年代までに一般に使われるようになり、さらに「コテージ・ガーデン・アロットメント」といった複合語ではなく、単独で頻繁に使われるようになるのは一八四〇年代だという。Burchardt, op.cit., p. 240.
- (62) バーナードはまた、この土地全体をしばしば「囲い地」(inclosure)と呼んでいる。
- (63) [Charles] Taylor, *The Working Man's Gardener. Dedicated, by permission, to Melville Portal, Esq., M.P. Containing Directions for the Propagation, Planting, Pruning, and Training of Fruit Trees; the Laying out, Fencing, Draining, and General Management of a Cottage or Allotment Garden throughout the Year...* (London, [1860]), p. 37.
- (64) Robert Adamson, *The Cottage Garden*, 2nd ed. (Edinburgh, 1856), pp. 1f.
- (65) こうした秩序は、たとえばアロットメント運動を推進する次の書物でとりわけ強調される。Charles Lawrence, *Practical Directions for the Cultivation and General Management of Cottage Gardens* (London, 1831). 著者はこう、「清潔さ、端正さ、規則性、秩序...という諸性質に厳格に注意を払うことは、福利にとってきわめて重要である。.....あらゆるものにおける秩序と規則性は、諸君〔労働者〕の注意に値する。そのおかげで時間と金の両方が節約できるだろう。あらゆる物に一つの場所を与え、あらゆる物を適所に置きなさい」(pp. 24f.)。
- (66) ケントも、「ロンドン、ノリッチ、バーミンガム、その他の産業都市」がもたらす道徳、健康、人口への害を、田園のコテージの理想と対比している (Kent, *Hints*, p. 231)。
- (67) 前掲拙著、第一章参照。
- (68) Cf. Burchardt, op.cit. ただし同書によれば、アロットメント運動は、農村における労働運動の組織化に役立つという地主にとっては予期せざる結果をももたらした。なお同書は、実際のアロットメント運動に三つのピークがあったと

する（一七九〇年頃から十九世紀初めの数年・一八三〇年から一八五〇年代初頭まで・一八七〇年以降本格化するもの）。言説の流れを中心に扱う本稿には、必ずしもこの厳密な区分は反映されていない。しかし後述するように、初期の言説と一八五〇年代以降の言説では、ガーデンにかんしても明らかに変化がみられる。

- (69) 本文中および註で言及したもの他、コテージ・ガーデンをタイトルにもつものとして次の道徳的童話がある。*Cottage Garden, or the Infant Tutor: A Moral and Improving Tale for Children* (London, [1820]). これも前提は他のものと通底する。

また、十九世紀前半の最も重要な造園家・庭園著述家、ラウドンの言説も、コテージ・ガーデンについては、以上のアロットメント運動関係の著作と大きな違いはない。Cf. John Claudius Loudon, *An Encyclopaedia of Gardening*, new ed. (1835; rpt. New York: Garland, 1982), pp. 1225f. さらにラウドンには、アロットメント運動ときわめて親近的な次の書物もある。*A Manual of Cottage Gardening, Husbandry, and Architecture; Including Plans, Elevations, and Sections of Three Designs for Model Cottage; Descriptions of a Mode by which Every Cottager may grow his own Fuel; A New Mode of Heating Cottage; A Scheme for Labourers and Others to build their own Cottages, on the Cooperative System; Calendrical Tables of the Culture and Produce of Cottage Gardens throughout the Year; Directions for Brewing, Baking, &c. and the Process for Making Sugar from Mangold Wurzel*. By J. C. Loudon, F.L.S. H.S. G.S. Z.S. &c. Assisted by Mr. Ellis, M. Gorrie, Mr. Taylor, and seven other Experienced Gardeners, Farmers, and Cottagers. *Extracted from the Gardener's Magazine* (London, 1830). これはコテージ・ガーデンにかんする受賞論文を集めたものである（当時同種の懸賞はしばしば行われた）。なおラウドンについては、拙稿『ガーデネスクなガーデン——J・C・ラウドンの生涯と造園思想』（アティーナ・プレス、二〇〇七）参照。

- (70) これはバーチャート (Burchardt, op.cit.) が（従来の研究の偏見に抗して）強調する点でもある。



- (71) フェミニズム的な立場に基づくセイヤーの研究は、コテージ・ガーデンにおける労働を主に男性的なものとする (Sayer, op.cit., pp. 99f.)。しかしすでにバーナードにおいても、庭園の管理はほとんど妻にまかされており、アロツトメント運動を推進した多くの文献では、コテージ・ガーデンは女性と子供に労働を提供する場とされている。
- (72) たとえば、一八三〇年の次の書物参照：「われわれの目的は、貧民に生産的な仕事を与え、そのことで貧民が生きたために自分自身の労働に依存するようにさせる方法を指摘することである。いいかえれば、われわれは自助 (self-support) の原理に基づく計画を提唱する。……すなわち、貧民にたいし小さなガーデンを体系的に割り当てること (allotment) である」(強調原文：Rev. James Thomas Law, *The Poor Man's Garden: Or, A Few Brief Rules for Regulating Allotments of Land to the Poor, for Potatoo Gardens* [London, 1830], p. 4)。<sup>9</sup> ちなみにたとえば、一八三一年の次の書物でも、同様の点が繰り返される：「このシステムは、労働諸階級の中に土地財産へのより大きな関心を生み出し、自分自身の中で独立しているという感情の増大をうながさだろう。……独立して幸福であり、自己に満足し、他人に迷惑をかけない」(Rev. Arthur Pearson, *Some Account of a System of Garden Labour, acted upon in the Parish of Springfield, Essex. With a Few General Remarks on Cottage-Gardening* [London, 1831], pp. 8f.)<sup>10</sup>。
- (73) Cf. Taylor, op.cit., pp. ivf.
- (74) たとえば、Pearson, op.cit.には次のようにある：「小さな土地をよく手入れする方が、手入れの行き届かない大きなガーデンよりも、つねによりよい収穫を期待できる。……適切な手入れができる規模のガーデンであれば、あらゆる小さな部分まで十分に耕し、清潔にすることに誇りがもてるだろう」(p. 18)。<sup>11</sup>
- (75) E.g., *An Essay on Farms of Industry, and An Essay on Cottage Allotments, or Field Garden Cultivation. From a Paper read before the West-Riding Geological and Polytechnic Society. Published with the Author's Permission. Also An Essay on Self-Supporting Schools of Industry, and Mental Discipline* (Huddersfield, 1844), pp. 18-21.

- (76) さらに典型的な例として、一八〇六年に出された書物の例を挙げておく。「コテージ住民にガ・ー・デ・ン＝農・業 (*garden-husbandry*) を広めることでえら・れ・る・か・も・し・れ・ない国家への莫大な利益を、こ・こ・で・見・積・も・る・こ・と・な・ど・で・き・ない。……それはつねに労働と行使にたいする報酬と奨励をもたらす。これを実践することで、家庭的な習慣が助長される。労働者は自分の所有物と家族にたいする紐帯を強める。彼の余暇時間にも、利益を生む仕事が供給される。居酒屋やバーで浪費と怠惰に耽る暇を与えない」(強調原文: *Account of Britton Abbot's Cottage and Garden*, op.cit., p. 11n.)。
- (77) たとえば本稿冒頭で引いたウィーダ (一八九五年) は、なるほどアロットメントの非美的な幾何学性 ('the painfully mathematical allotment field,' Ouida, op.cit., p. 48) には批判的だったが、コテージ・ガーデンについて次のように語っている。「這い上る白バラが草ぶきの屋根と交わるドアの向こうには、いまだによきユーモア、つましき、快活、清潔がしばしばみられる。そしてそれが、長続きする幸福や堅固な徳の唯一の形態である、現状への男らしい満足と結びあっているのである」(p. 49)。これは美的な要素と過去志向性さえ除くならば、アロットメント運動の言説とそのまま連続する。

- (78) Pearson, op.cit., p. 29.
- (79) William Shenstone, 'Unconnected Thoughts upon Gardening,' *The Works in Verse and Prose* (London, 1764), II. 13. 最後の部分は原文がラテン語であり、ルクレティウスからの引用 (Lucretius, *De rerum naturae*, lib. 2, 1)。
- (80) Everett, op.cit., p. 144.
- (81) Cf. Christopher Hussey, *The Picturesque: Studies in a Point of View* (1927; rpt. London: Frank Cass, 1983), pp. 204-08.
- (82) そうしたピクチャレスクな慈善を実際に行なった有名な例として、ブレイズ・ハムレット (Blaise Hamlet, Gloucestershire) を挙げるのができよう。これは建築家のジョン・ナッシュ、および造園家レプトンの息子、ジョー・スタンレー・レプトンによるものである。Cf. Darley, op.cit.

(83) Uvedale Price, 'An Essay on Architecture and Building, as Connected with Scenery', *Essays on the Picturesque* (1810; rpt. Farnborough, Hants.: Gregg, 1971), II. 344, 342. プライスの *Essay* は、一七九四年に初版が出た後、たびたび改訂・増補される。こゝで引く建築論は、一七九八年の *Essays* 第二巻が初出である。引用に際しては、一八一〇年に出了三巻本の全集版といつてよいものを用いる。

(84) 前掲拙著、一九七二〇〇頁（および註）参照。

(85) Richard Payne Knight, *An Analytical Inquiry into the Principles of Taste* (1805; 2nd ed. 1805; rpt. Bristol: Thoemmes, 1999), pp. 222f. 類似の批判として、William Marshall, *A Review of The Landscape, a Didactic Poem: Also of An Essay on the Picturesque: Together with Practical Remarks on Rural Ornament* (London, 1795). やういブライスやナイトの論敵、造園家のレプトンも同様の批判をする（前掲拙著、二二五―二八頁〔および註〕参照）。しかしレプトンは他方で、美的な庭園と現実の貧民が住むコテージとの調停の可能性を説いている。Cf. Humphry Repton, *Observations on the Theory and Practice of Landscape Gardening* (1803; rpt. Oxford: Phaidon, 1980), pp. 137f.

(86) 庭園論の文脈を離れるが、ラスキンが行ったピクチャレスクなコテージについての論及も、同じ美と博愛主義との調停／亀裂の観点からとらえることができる。ラスキンは、ピクチャレスクを「寄生的崇高」とする独自の考えをもっていた。すなわちピクチャレスクは、たとえばコテージの場合、住まうというその本来の実用性に、自然の崇高さが寄生するときに生ずるというのである（『建築の七灯』（一八四九年）。しかしこれでは、彼が擁護するターナーのピクチャレスクが単なる寄生的なものとなり、その独自性が薄れてしまう。そこで彼は、『近代画家論』第五部（一八五六年）の「ターナー的ピクチャレスク」において、ターナーのピクチャレスクが、物の本来の機能・本質、真の人間性を把握する「共感」を有するものであり、単なる低級なピクチャレスクとは区別されるとした。しかしその上で、低級なピクチャレスクもなお、何ほどか「底流」として、そうした道德性に通じる感情を有していたのである。

そしてその重要な例としてコテージが挙げられる。ここにもまた、ピクチャレスクと実用性、美と博愛主義との亀裂を認めつつも、両者を調停しようとする傾向をみる事ができる。John Ruskin, *Modern Painters*, Pt. 5, Ch. 1, in *The Works of John Ruskin* (Library Edition), ed. E. T. Cook and Alexander Wedderburn, IV (London: Allen, 1904), esp. pp. 15, 19-25.